

らぶさん・ふいーるどの佐野咲百合代表(根雨)。「自分の悩みに対し、親身になってくれた。自分を応援してくれる人ができてとても心強かった」と話すように、佐野さんのアドバイスのおかげで脚本が完成。それだけでなく、演劇祭に向けた演技指導も買って出ってくれたのだ。

人の縁とは、いつも突然で不思議なものだ。職場体験でできたつながりに、名谷の一步を踏み出す勇氣。それらがまた新たなつながりをつくる。そんな素敵な縁を地域とのかかわりが結んでいることが分かった瞬間だった。

地域に根ざした高校 その財産を生かした 教育環境づくり

日野高校は、前身の「根雨高」「日野産高」時代から、地域とのかかわりを大切にしてきた背景がある。平成12年に両校が合併して日野高校となった現在でも、黒坂小学校との交流など、地域に根ざした教育環境づくりを行っている。

平成26年に誕生した日野

高校の魅力向上を担う片平誓子コーディネーター(米子市)も、「地域と協調することで独自の学びが生まれる。それが学校の魅力となり、地域にも、未来を担う子どもたちにも、必要とされる学習の場になる」と話す。地域と共に歩んできた日野高校の財産を生かすため、彼女は現在、地域の中に生徒が活躍できる場づくりに励んでいる。地域を題材に講師を招いたり、授業を町の中で行うフィールドワークが、その例だ。

新しいことを次々と始めるのではなく、授業との一貫性や生徒の成長などを考慮しながら、カリキュラムのバージョンアップを図っている。

生徒が自ら考える機会に 地域と共に学ぶ課題研究

特に、3年次に行う課題研究は、高校の学習の集大成として位置づけられている。生徒それぞれが関心を持つ事柄についてテーマを決め、約半年間にわたって調査研究し、その成果を発表するのだ。2年前からは地域をテーマにした生徒に

対し、地域の人にサポートを依頼。生徒と共に現場に出かけ、研究のサポートを行っている。

名谷も地域をテーマにした一人だ。もともとは、別のテーマだったが、「調べて終わりじゃなく、成果が残るものにしよう。どうせなら地域に出かけたい」「3年間もいて日野町のことを知らない自分がいた。もっと深く知りたい」と、日野町紹介パンフレット作成のきっかけを話す。

彼女がパンフレットを作る上で、こだわったのは、できる限り自分の目で見た日野町を収めることだった。金持神社やおシドリだけでなく、祭りや地域で頑張っている人など、彼女の目線で切り取った日野町の魅力が集まっていった。そのことがまた新たな縁を結ぶことになる。

町の本物の魅力とは？ 課題研究で手にした答えと 新たな出会い

約半年間におよぶ取材を終え、パンフレットが完成したのは、12月の発表会前日だった。自分で撮りため

もうカエル...?

日野のミリオクでおもてなし♡

むカエル 日野

日野町紹介パンフレット

私が見つけた日野町のミリオク。集めてみマシタ。

『お迎えする心』を形にした日野町PRパンフレット
※パンフレットは、日野町ホームページからダウンロードできます (<http://www.town.hino.tottori.jp/>)

特集 この人に注目

た写真を並べ編集作業を行う中、彼女の胸にあつたのは、「3年間過ごした町に何かを残したい」との思いだ。

「町にどのような魅力があるのか分からない自分がいた」「近くにいると気付かなくなるものもある。だから、日野町に住む大人や子どもが、町の魅力を再認識できるものになりたい」。課題研究の発表会で、生徒や教師、地域の人を前に、堂々と町の魅力を語る姿がそこにあつた。

課題研究を終え、彼女に印象に残っていることを聞くと、松本洋一さん（根雨）との出会いを一番にあげた。松本さんは、町の豊かな自然を生かし、海藻肥料を使った「海藻米」などを作るコメ農家だ。

「松本さんは、2つ返事で取材に来ることを了承してくれ、やさしく接してくれた」と、松本さんの人柄に触れ、自分もすぐに距離を縮められたという。ほかにも、お茶屋おがた（根雨）で、お茶の作法を丁寧に教えてくれたことや手がきれいだとはめられたことなど

をうれしそうに話した。そんな彼女に、もう一度日野町の魅力を聞くとこんな答えが返ってきた。

“本当の魅力は、人と人とのつながり。そして、誰かが優しく手を差し伸べてくれるところだと思う”

**“地域のために”という
視点をもつこと
それが彼らを成長させる**

ほかに独自の目線で新たな町の魅力を掘り起こした生徒たちがいる。それが、町のPR動画を作成した、石井拓海・北崎虎雅・折口脩（日野高校3年）の3人だ。彼らも、地域とかわかっていく中で、町の魅力を知り、町の活性化につなげたいとの思いが芽生えたという。とにかく楽しい動画にしたいと、彼らを選んだテーマは、ラフティング、オシドリ、金持神社の3つ。ラフティングでは、平日にも関わらず快く協力してくれたD.O.スポーツのスタッフと日野川くだりを満喫、オシドリ観察小屋でのインタビューでは、スタッフの森田順子さん（根雨）とのエピソードを明かしてくれ

た。

日野町と東京都杉並区とのオシドリを通じた交流は22年間続いている。杉並区の小学生たちがオシドリのエサであるドングリを集めて日野町へ送り、毎年町を訪れ地域との交流を行う姿は、「オシドリ天使」と呼ばれ親しまれている。

そんなオシドリをめぐる物語を聞いた彼らは、動画の中で「僕らも（オシドリを通じ）森田さんとながった」と笑顔で返している。何気ない一言だが、それこそが彼らが地域に出かけなければ無かった気づきであり成長だ。

森田さんも「高校生が町のためにいろんなことを考へ、実践してくれていることがうれしいし、元気をもらえる」と目を細める。片平コーディネーターは「課題研究の目的の一つは、生徒が『地域のために』という視点を持つこと」と話す。そういつた視点や気づきを生み出す機会をつくることで、生徒には「自ら学び考へる力」が付き、社会の中で活躍する原動力となってくれるはずだ。



▲稲の刈り取りなど秋の繁忙期にもかかわらず早く取材に応じた松本洋一さん（左）



▲高校生の遊び心がたくさんあった日野町PR動画※日野町ホームページからご覧になれます